

イエス様は最初の頃、イスラエルの北の方、ガリラヤ地方で活動されたのですが、同じガリラヤでも、故郷のナザレと、活動の拠点となる、ガリラヤ湖の周辺では、同じことを語っても人々の受け取り方が全く違いました。今日の福音書には、それが現れているので、その話をしようと思います。

今日の福音書は、先週福音書として読まれた話の続きです。

先週の箇所を少し説明すると、イエス様は安息日に故郷ナザレの会堂で聖書を読まれました。

読まれた聖書の箇所は、イザヤ書61章の冒頭の部分でした。

「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。」

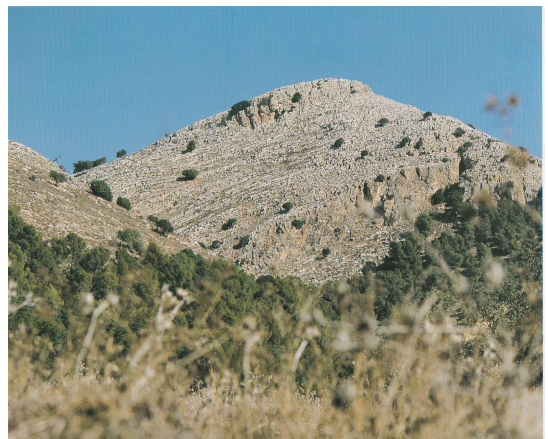
そしてイエス様は、これを読んだあと、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と言われました。イエス様は、ご自分のことを、イザヤ書に書かれている、貧しい人々に福音を告げ、人々の重荷を取り除いて解放する救い主である、と宣言されたのです。

これを聞いて皆はイエス様をほめ、その口から出る恵み深い言葉に驚いたと書かれています。ところが、話が悪い方に展開してゆきます。

先週の福音書で、イエス様の評判がガリラヤ地方一帯に広まっていたことが書かれていたから、そのつもりで今日の箇所を考えてください。華々しく活動を始めたイエス様が故郷に帰ったので、ナザレの人々はイエス様に奇跡を期待していたのでしょう。しかしイエス様はそんなナザレの人々の態度を批判して、「預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ。」と言い、昔この地方で活動していたエリヤやエリシャを例に挙げ、預言者が力を発揮できたのは、外国人に対してだけであることを語られました。

自分を救い主であると宣言しておきながら、故郷の人々のためには奇跡を行わないというイエス様の姿勢に、人々は頭にきて、ナザレの町の南側の崖に連れて行って、イエス様をそこから突き落とそうとされたという話になります。

現在でも、聖地旅行に行きますと、イエス様が育ったナザレの町の南側に、ゴツゴツした岩だらけの山があって、イエス様はここから突き落とされようとした、とガイドさんが説明します。



ところが、福音書の最後では、イエス様が、ナザレから北東へ30キロほど離れた、ガリラヤ湖の周辺の町カファルナウムで、やはり安息日に教えられると、その教えには権威があって、人々は驚いた、ということになっています。イエス様は故郷では受け入れられない預言者のようでした。しかしイエス様の昔のことを知らないカファルナウムの人々は、素直に話を聞いてくれた、ということでしょう。

福音書の中で、イエス様は、ことわざのことを言われましたが、これはイスラエルのものではなく、ギリシャのことわざです。「預言者は自分の故郷では受け入れられず、医者も、自分を知る人々に癒しを行わない。」ということわざをイエス様は引用されたのでしょうか。これは、預言者や医者が力を発揮するためには、預言者や医者以外の、別の要素が関係しているということだろうと思います。

私は以前、韓国ドラマ「チャングムの誓い」を見ていて、その中で彼女が言った、「病は、医者が治すものではなく、患者が治すものだ。」という言葉が印象に残っています。医者の勧めを素直に受け入れて、自ら治ろうと努力する時、その治療は成功する、ということでしょう。

これと同じように、預言者が語ることを、人々が受け入れる時、そこには良い結果が生まれるのですが、しばしば、預言者が語ることと、人々が求めているものの中には、食い違いが生じます。

これが政治家と有権者ということなら、有権者は、自分たちの要求に応じてくれる政治家を選ばばいいし、政治家は有権者の要求に応えればいいのです。人々は現在の苦しい生活から救い出してもらって、楽になりたいと思っています。エジプトで奴隷生活だった人々を救い出したモーセに対して、荒野の旅の途中、食べ物なくなると人々は、「エジプトには、食べ物がたくさんあった。あの頃の方がマシだった。」と言い出します。もし、モーセが政治家なら、「それではエジプトへ帰ろう」ということになったかもしれません。

しかし、預言者というのは、民衆の声を聞くのが仕事ではなく、神様のお考えを人々に告げるのが仕事です。モーセは人々の要求に応えるのではなく、エジプトに帰らないで、荒野に留まりました。それには理由があります。

モーセは荒野の40年の旅の終わり頃に、次のように語りました。「あなたの神、主が導かれたこの四十年の荒野の旅を思い起こしなさい。こうして主はあなたを苦しめて試し、あなたの心にあること、すなわち御自分の戒めを守るかどうかを知ろうとされた。主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。」(申命記8：2～3)

モーセが、天からパンやウズラを降らせたり、岩から水を出したりした奇跡は、人々の要求に応じて、人々を喜ばせるためではなく、人々が、自分を造った神様と直接結びついて、神様の意志を行う者になるためでした。

人間が、自分のために神様とか預言者を利用してやろう、という時に、神様の意志と人間の思いの間には、食い違いが起きて、そこでは力が発揮されず、奇跡も起こりません。

しかし、人間が悔い改めて、神様の御心、神様のご意志を知り、それに協力しようとする時、思いがけない出来事が展開して、奇跡も起こるのではないかと、思います。ところが、預言者の故郷では、昔からその人のことを知っている人々なので、わがままな要求ばかりで、預言者の言葉を素直に受け入れない、ということがあつたのではないかと、今日の福音書などを読むと、感じてしまうのです。

現代において、政治家とは違う、預言者のような役割を負っている人とは、どんな人でしょうか。一昔前なら、アメリカの元副大統領アル・ゴアさんがそれにあたったかもしれません。彼の著書「不都合な真実」という本ですが、地球の温暖化の問題を取り上げています。

政治家も有権者も、両者とも豊かな生活を求める場所があって、お互いの利害が一致しやすいですが、その一致は人間の間だけのことです。神様の意志、神様が人類に望まれることは、人々の願いとは食い違いが起こるものです。政治家にとっても、有権者にとっても、地球の温暖化というのは、関わりたくない、問われたくない不都合な問題ですが、それをほっておき、目をつぶることによって、人類は自分たちで、自分たちの住んでいる環境をだめにしているのです。

それに気づいて、生活を変えよう、という時、奇跡が起こるのではないのでしょうか。地球を取り巻くオゾン層に穴が開いた時、その原因をつきとめ、ついには、みんなフロンガスの使用をやめることに成功したことがありました。

はたして、現在の預言者は誰なのでしょう。私たちは、何に目を向け、耳を傾け、その声に聴き従うべきでしょうか。日本の防衛費が、GDPの1%だったものが2%になったり、収入は増えないのに、物価がどんどん高くなったり、生活に困っている人が多くいます。もしかしたら、経済アナリストの森永卓郎さんかもしれません。彼は死後の世界など信じないと言っていますが、「書いてはいけない」「ザイム真理教」「がん闘病日記」など、昨年末にがんのステージ4を宣告されて、政治家やマスコミが避けている問題を、いろいろ書きだして、警告を発しています。そして他にもそんな人が何人もいることに気づきました。

それを、ポーっと聞き流すのではなく、気になったら、関連の本を1冊でも読んでみるとか、インターネットで調べて、複数の意見を聞く努力が必要なように思います。

それらを自分たちの利益だけではない視点から、冷静に考えて行くなれば、それが実は神様の視点から観ることにつながり、御心を行なう者になってゆくのではないのでしょうか。

現代の預言者たちの声を聞き分ける能力を持ち、それを受け入れる素直な心を持ちたいと思います。

(これは2月2日には説教しませんが、前の週と関連があるので、掲載しました)